

論文の要旨

論文題目 現代中国語の空間移動表現に関する研究
氏名 丸尾 誠
学位 博士（文学）
授与年月日 平成16年3月25日

本研究は、現代中国語の移動動詞（motion verb）を中核として構成される空間移動表現の諸相について考察したものである。

移動動詞は単なる物理的な位置の変化にとどまらず、より抽象的な概念を表すことができるという点で、個別言語において重要な位置を占める。移動動詞の研究は語彙・構文論など広い分野で行われているだけでなく、近年ではさらに人間の認知的側面からのアプローチも試みられており、対照研究論文も少なくない。本研究では現代中国語の移動事象に関わる各種統語形式の分析を通して、空間移動に対する発話者の認識が中国語という言語の語彙・文法体系の中に如何に反映されているのかということの解明を目指した。

本研究は序論、結語の類を除いて、全部で11章の本論から成る。

第1章ではまず英語・日本語との比較を通して、中国語の移動動詞および移動に伴う空間表現にみられる特徴について、世界の諸言語における移動表現の類型化を試みた Talmy1985 / 2000^注 の概念を援用しつつ考察を試みた。ここでは移動動詞の有する「様態性」(manner)と「方向性」(direction)という性格がクローズアップされることとなるが、両概念は本研究のキーワードとなるものである。そして以降の章では、移動事象を構成する諸要素である「場所」(第2、3章)、「移動段階(移動・到達・存在)」(第4、5、6章)、「移動物」(第7、8章)、「方向」(第9、10、11章)というテーマをそれぞれ中心に据えた考察をすすめた。

第2章では中国語のいわゆる場所詞の有する「モノ」と「トコロ」という側面に着目し、両概念が統語構造に如何に反映されうるのかについて考察した。ここではモノをトコロ化する際に、対象の属性をその機能・行為との関連において話者が如何に捉え、それを表現するかということを中心に述べた。移動表現においても、第2章で扱った存在表現と同様に場所目的語のトコロという面が引き出されるにもかかわらず、この場合には通常方位詞は用いられない。第3章ではその要因と方位詞の使用が可能となる統語的手段について考察した。

第4章では主体の移動を表す動詞の有する「様態性」「方向性」といった意味特徴から、これらが到達を表す“VL”および“V欺L”形式（V：動詞、L：場所を表す語句）に与える影響について考察した。

第5章と第6章では主として「静態」と「動態」という概念からのアプローチを試みた。

一般に“V+欺+L”形式と“V+壓+L”形式を比較した場合、前者の焦点は動作の過程（移動）に置かれるのに対し、後者では動作終了後の結果状態（存在）に置かれることから、両者は「動態 静態」という対立の構図で捉えられることが多い。しかし動詞によっては“V+壓+L”でも動態義を表すことができ、こうした場合、通常は統語的に“V+壓+L”を“V+欺+L”と変換することができる。さらにLが「着点」あるいは「存在場所」のいずれとして認識されたものなのかということも、両形式の成立の可否に影響を与える。第5章ではまず主体・対象の移動を表す移動動詞を分類した後に、それぞれの動詞の意味特徴に着目し、“V+壓+L”形式との比較を通して、“V+欺+L”形式の表す意味について考察した。また、動作・行為の実現と目的の達成、および動詞の有する「獲得義」「消失義」などの意味特徴の対立といった観点から、“V欺”の表す意味についてもあわせて考察した。

第6章では“壓+L+V”“V+壓+L”両形式の成立の可否および意味の異同を生み出す要因に、移動・存在義を媒介とした意味解釈が如何に関わっているのかについて、Vの表す「静態義」「動態義」という概念を援用しつつ、アスペクト・ヴォイスという観点を交えて考察した。そして両形式の成立の可否には、動詞のもつ意味特徴の1つである「方向性」の有無が関わっていることを示した。

第7、8章では、“貫+L+VP”および“壓+L+VP”形式（VP：動詞フレーズ）によって表される主体の移動（通過義）、対象の移動（来源義）について考えた。

「様態移動動詞」(manner motion verb)は、その[-方向性][+持続性]という意味特徴により、介詞フレーズ“壓+L”と共起可能である。一方、「方向移動動詞」(direction motion verb)は、その[+方向性]という意味特徴により、“壓+L”とは相容れない。しかし、「主体の移動」を表すとき、方向移動動詞を用いた場合でも、移動という事態を同一領域内で進行している行為として描写することにより[+持続性]が実現し、その結果、“壓+L”と共起可能となる。第7章では方向性によって実現される「通過」という事象を取り上げ、“壓+L”と“貫+L”の統語的な置き換えの可否を通して、“壓+L”と方向性を有する移動動詞が共起しうる条件について、そこに反映された話者のLに対する認識という角度から考察した。

第7章で取り上げた「主体の移動」を表す場合と比べて、「対象の移動」を表す場合には起点をマークする“壓”“貫”の使用に関してインフォーマントによってかなり揺れがみられる。そこには、移動事象に関わる要素（移動物、位置関係、距離、方向など）に対する発話者の認識が多分に影響を与えていると思われる。第8章では対象の移動を表す“(S+) 壓+L+V+O”および“(S+) 貫+L+V+O”形式(S:主語、O:目的語)における介詞フレーズ“壓+L”“貫+L”の意味機能の問題を、S・OのLに対する位置関係との関連において考察した。

第9、10、11章では“栖/肇”によって表される「方向」に関連する問題について考えた。

第9章で扱ったのは、VPが“肇”の目的を表す連動構造“肇+VP”と“VP+肇”である。ここでは両形式の意味的・統語的相違、およびそこから生じる表現的効果について、移動動詞“肇”の表す移動段階というものを考慮に入れつつ考察した。また、同様の意味を表すものの、移動の方向が異なる“栖+VP”“VP+栖”両形式についてもあわせて取り上げた。

第10章では動補構造“V 栖”形式で表されるもののうち、“択栖”のような継起的動作(～テクル)を表すパターンを取り上げた。これは意味的には「動作+移動」という組み合わせであるが、動作動詞とその下位類である移動動詞それぞれのもつ「動作義」「移動義」という意味特徴に着目し、介詞フレーズ“壓+L”との共起の可能性について考察を試みた。あわせて“V 栖”とは方向が逆となる日本語の「～テイク」に相当する“V 肇”“V 恠”の形についても論及した。

第10章同様、第11章でも動補構造を考察対象とした。ここでは、実移動から結果義・アスペクトに関わる用法までカバーしうる複合方向補語における“栖/肇”の表す意味的機能について、“栖”の表す出現義・“肇”の表す消失義との関連から考察した。そして移動実義が表されているときのみならず、派生義を表す際にも「出現・消失」に対する話者の認識が、動詞・形容詞の語義との関係において機能的に運用されていることを述べた。

最終章のまとめでは移動を表すプロトタイプといえる「VL形式」「介詞を用いた形」「存現文」の3つの形を用いて、本研究で論及した経路表現の方法に反映された認識について総括した。

注)

Talmy, Leonard . 1985 . Lexicalization Patterns : Semantic Structure in Lexical Forms . In T . Shopen (ed .) , *Language Typology and Syntactic*

Description, vol. , *Grammatical Categories and the Lexicon*, 57 - 149 .
Cambridge : Cambridge University Press .

Talmy, Leonard . 2000 . A Typology of Event Integration . *Toward a Cognitive Semantics*, vol . : *Typology and Process in Concept Structuring*, 213 - 288 . Cambridge, MA : The MIT Press .